

デーヴァダッタへの向き合い方

現代宗教研究所所長 三原正資

猛暑の残る平成二四年九月の初め、池上の街でおもしろい光景を見た。直進する警官の自転車に、斜めに交差する細道から出てきた自転車が突き当たる形になった。中年の女性は半ば押搦するように若さの残る警官に「どちらが悪いんでしょうか？」と言った。警官は穏やかに、しかし、確信をもって、女性の方に手を上げたのであった。女性は「すみませんでした」と言っ、そのまま走り去った。

私はその様子を見て、現代の日本は法治国家なのだと思いつながら、二年ほど前、ミャンマーのお坊さんの一行が宗務院を訪ねてきたときのこと——随行の通訳が、正午までに食事を摂らないと、今日は食事ができなくなり、困ったことになる、と騒いでいたこと——を思い起こして、現代の日本は東南アジアの仏教サンガと似ているのかもしれないとも思った。

さて、デーヴァダッタは厳格な修行者だったとの説が私の記憶にある。

デーヴァダッタが釈尊に敵対したことは仏教史上の重大事件である。宗祖もたびたびこの事件に言及され、法華題目抄には、

提婆達多は（略）教主釈尊にはいとこにあたる。南閻浮提にからからざる人なり。（略）外道の六万蔵・仏の八万蔵を胸にうかべ、五法を行じて殆ど仏よりも尊きけしきなり。両頭を立て、破僧罪を犯さんがために象頭山に戒壇

を築き、仏弟子を招取り、阿闍世太子をかたらいて云く、我は仏を殺して新仏となるべし。太子は父の王を殺して新王となり給へ。(略) 生身に無間大城に落ちにき。(定遺三九八〜九頁)

と述べられている。ところで、この話は、賢愚経堅誓師子品には、次のように説かれている。

爾の時、提婆達多恒に悪心を懷き世尊に向ひ如来を害せむと欲す。自ら称して仏と為し、阿闍世に父を害し王と為れ、新仏・新王天下を治理おさむるを亦快らずやと教ゆ。王子、信用し便ち其の父を殺し自ら立ちて王と為れり。(以下略)

デーヴァダッタはこの他にも賢愚経の鋸陀身施品、月光王頭施品、快目王眼施縁品、善事太子入海品で取りあげられ、いづれも、常に積尊に敵対する悪人として描かれている。

さて、歴史とは勝者によって語られる善と悪との戦いの物語として伝えられる。(デーヴァダッタが積尊とのたたかいに勝利していたならば、デーヴァダッタによる仏教史が物語られたらう。)

法華経のデーヴァダッタ観は、「調達破僧罪」と記す陀羅尼品は賢愚経と一致するが、調達多品はこれと異なりデーヴァダッタは積尊過去世の師であると説き、デーヴァダッタを三世にわたって積尊に敵対する悪人と説く賢愚経の説相と大いにちがうと言わなければならない。

デーヴァダッタ悪人説を前提とされた宗祖は開目抄に、観無量寿経に説かれるいわゆる王舎城の悲劇を引用され、次のように述べられている。

此経の中に世尊復有何等因縁等の疑は大なる大事なり。(略) 仏は無量劫の慈悲者なり。いかに大怨と共にまします。還て仏にはましまさざるかと疑ふなるべし。而れども仏答へ給わず。されば観経を誦誦せん人、法華経の提婆品へ入らずばいたざることなるべし。(定遺五七五頁)

「此の疑」(定遺五七六頁)に対する答えこそが「寿量の一品の大切」(同)と、宗祖は示され、具体的には、開目抄の

仏と提婆とは身と影のごとし。生々にはなれず。聖徳太子と守屋とは蓮華の花果同時なるがごとし。(定遺五九九頁)

の一節が、疑いに対する答えと思われる。

さて、この「仏と提婆とは身と影のごとし」というものの見方は、私たちの歴史や今日の時代への見方を柔軟な見方へと変えてくれると思うが、どうだろうか。

かつて私の周囲の大人たちは、戦後もながく、太平洋戦争を指導した東条英機首相兼参謀総長のことを、いつも「東条さん」と親しみをこめて呼んでいたのを思い起こした。「戦後」の歴史では、「東条さん」は悪者に仕立てあげられ、当然、私は周囲の大人に異和感を抱いていた。私には戦前を賛美する気持ちはまったくないが、六〇年ものあいだ、勝者と体制が欲した「戦後」史を生きてきたのかもしれないことに、私は気がついた。

さて、「東条さん」を悪人に仕立てて日本統治を成功させたアメリカは、その後の半世紀、この手法を使って冷戦の勝者となったが、一〇年前のイラク戦争で、この手法は半ば失敗したようである。

では、日本はどうだろうか。

たとえば最近の雑誌『SAPIO』（小学館）の表紙には次のような活字がおどっている。

中国 国家と社会が「壊死」する！

まさに「清朝末期」と酷似している

暴走韓国の「悲しき品格」

（二〇二二年九月一九日号）

日本は旭日のASEAN10か国と直接結べ！

新・大東亜共栄圏

中国抜きの「アジア繁栄構想」を提唱する

そして韓国は「アジアの嫌われ者」だった

（二〇二二年一〇月一〇日号）

いまこそ日本人の「誇り」と「自信」を謳い上げる

中国よ！ 韓国よ！ 「ニッポンの覚悟」

（二〇二二年一二月号）

もし戦わば「日中開戦」勝利の条件全予測

「中国ミサイルvsイージス艦」から「戦わずして勝つ」まで

〃日本の選択〃を探る

(二〇一二年一二月号)

あたかも日中開戦前夜のありさまだが、中国、韓国を悪者に仕立てるところは、アメリカの手法と変わらない。私たちは「悪者」への向き合い方を法華経・日蓮聖人に学ぶ必要がある。